

《Bible moralisée(ビブル・モラリゼ)》は13世紀前半からフランス王家の要請により製作された、豪華な挿絵入りの抄録版聖書注楷書である。新旧約聖書から任意的に抜粋した場面とそれを解釈した注解とがひとつの対をなし、それぞれが挿絵とテキストによって説明されるという稀有な構成を持つ書物である。

本発表は、聖書から抜粋された各場面がどのような理由をもって選択されたのかという問題について、現存する写本の中で最も初期に成立したと見なされているフランス語版写本(ÖNB, Cod.2554)における典拠不明の一場面を主な手がかりに考察するものである。

現在オーストリア国立図書館に所蔵されるこのフランス語版写本は、1215年頃、ルイ9世の王母ブランシュ・ド・カスティーユの要請により、パリで製作されたと考えられており、同館所蔵のラテン語版写本(ÖNB, Cod.1179)と並んで、15点現存する写本系列の中でも最古の形態を有するものとして知られている。

《Bible moralisée》における場面選択の問題について美術史家ハウスヘアは、6点の《Bible moralisée》写本と《コットン創世記》写本に掲載された創世記冒頭部の各場面を対照一覧表にし、比較分析によって、《Bible moralisée》が抄録版聖書と考えるには重要な場面の遺漏や省略が目立つことを1988年の論考で指摘している。ハウスヘアは、この遺漏や省略の理由を、場面選択の基準を見出すことによって説明しようとしたが、その試みは一貫性に欠け、明確なものとは言いがたい。確かに、各場面に共通する基準を見出すことは、極めて困難である。そこで本考察では少し観点を換え、書物の持つ物理的条件に注目した。

各場面のレイアウト上の配置関係に注目すると、「ページ」という物理的区分が場面選択を左右する重要な要件であることに気付かされる。すなわち、①ページの左上端に、各書冒頭、及びひとつのまとまりを持った説話の冒頭場面が配置されている点、②聖書本文が改変されている箇所、過度の要約なされている箇所、さらに聖書章句に典拠を持たない出典不明の場面が、ページの末尾すなわち右下端部に集中している点、それに加え、③この典拠不明の場面では、その直前の場面で使用される「異教徒」の語と、直後の場面(つまり次ページ先頭)の「アブラハム」の語が、あたかも物語の橋渡しの用に用いられている点、という以上の3点から、物語の叙述はページ単位で構成されているということがわかる。このような観点からわかることは、③の典拠不明の場面は、後続する新たな物語を次ページの先頭から開始させるためにあてがわれた一種の「埋め草」という性格を持っていることである。

このように「ページ単位の構成」という物理的な規制は、場面選択を左右する要件のひとつであり、またそれは聖書本文の改変や聖書に典拠を持たない場面の挿入をもさせるほど重要視されていたということができよう。